

内一二七六二號

見聞雜記卷之八

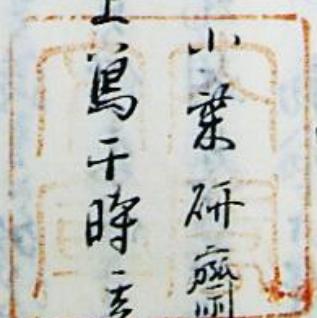
小葉研齋 輯

行日相撲書上寫于時亥

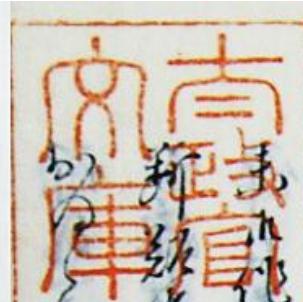


同上

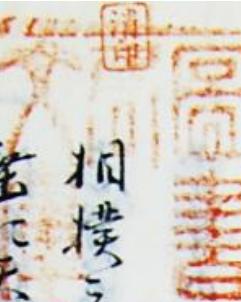
正月十日 上覧



轉



同上



同上

相撲之起志大體大神之時分始 朝廷而
至天皇之御年相撲之古今之行跡皆
化流不正事之端而已相成時自之歲
又聖武天皇神龜年中至良之幼不
直江國志貴之清林ら者也古清
行日之達のりんく分お撲之式赤浦古傳
あ源古傳之紀多年を兵亂古傳子江今之
行不中志貴家も自然形経傳也

一後多院文治年中再お撲之第今之行氣
志貴家新絶之上志古行日で古勵者普く
少事也及之松先祖吉田豐後守家以ち中
者城前國所生志貴之故實傳來傳外名達
敵用方叙之佐近風之名ひ賜朝廷少お撲之
同行日にて多之名也志貴勅令下時百合

用外木根源子多之活國翁を賜代之お撲之

貢會乃式古勤中以而永名之矣紀效之貢會
半終估外

一正觀町院水添集中相撲之貢會之行外之十
三代目近風所好而例古勤中供

一元龜年中二條園向清良公今日中古撲之作
法二派之之車之一乘清風占中少萬爾
是鷹帽子狩衣居衣四幅之清方下、每以日後
信音秀吉公

權現集沖代太鼓に相撲之式古勤元和年
九月十七日於紀州和歌山

東照宮神氣遣古撲之式底、印於沖野紀奉
行朝比奈忠臣馬廻り高車才合古勤中供
印力活領估外

一十六代目近風之、朝廷古撲之貢會也ノ
半終成行中以二條極少數少々古撲之骨也經
筋身海也所不有也古撲之所當中交所古撲不經
之通古叶一万治元年分當家也此古撲古勤中以
入之之也此有之

一元祿年中

常憲院様枝野俊後高柳安為 成古撲

上達之弟坂方橋木家東洋水庵大鳥占中仁

入之之也此有之

將軍在上院或相傳而之深源內侍
一元祖公私通款合十九代前之通
禁裡之外之小方梗公通之深源之品今以
持行相接之故實傳授傳來以
一當序諸國之行司事力士左之免許鑑

介之卷中以

右之通請不外以

細川誠中吉原末

寛政元年十月

吉田吉左衛門

吉風之免許傳授之寫

免許

一端綱之事

右者若風推之間相接之經依向接與
平之東方臣入之節追相用不中以
依向之件

寛政元年十月九日

本朝相接之司行司
十九代

吉田追風判

○上覽之一式

寛政三辛亥年春相撲

勧進元

鎌山喜平治

差添

伊勢海村右衛門

右春相撲本所於回向院境内興行仕候處町御奉行池田筑後守殿御差紙ニテ勸進元差添罷出ヘキノ旨申來リ早速喜平治村右衛門罷出候處相撲 上覽之御内意ニ

外御書附下サレ候

同廿三日勸進元差添書附持參之處土俵繪圖并相撲名前二枚ツ、明廿四日持參致スベキ旨申渡サレ翌日相撲之式并 上覽御場所繪圖兩マウトモ池田筑後守殿御役宅江差出申候

但土俵并四本柱引幕トモ伊勢海村右衛門仰付ラレ請負ニ仕立上ル

同廿六日池田筑後守殿御役宅ニ於テ喜平治村右衛門

江 上覽相撲仰付ラレ難有旨御請仕候

六月二日場所見分有之相濟同日相撲取組相撲人惣人數人別書着出候且又右之通今度 上覽被仰出候共相撲人之儀隨分萬事相慎ミ我雜ケニシギ與之様年寄共急度可申付段被仰渡候

六月五日又候喜平治村右衛門召出サレ筑後守殿御役宅ニ於テ當十一日相撲 上覽可有之旨仰付サセラレ難有御請申上ル旦和來 禁庭第會ノ祭事相勤候相

樸司御行事 吉田追風末流 吉田善左衛門被召出則罷

出吉法之通相勤申候 土俵場之儀勧進相撲トハ格式等モ

別ニ候故 左ニアラハス

六月十一日 晩六ツ時 竹橋御門外御眷屋前ニテ惣年寄行事相撲人殘ラズ染帷子麻上下帶刀ニテ相撲場所休息所溜リ江入り差扣罷有候

○上覧土俵之古實

一 四本柱之間三間四方柱ヨリ柱ヘテノ内土俵七俵
ツ 四ワ合セテ數二十八俵ハ天之井八宿東西南北ニ須弥四天ナ合セテ惣數三拾六地理汰釦相撲人古三十六人ナ司法ナリ

一 内丸土俵數十五八天之九地之六東西ノ入口ハ陰陽和順之理也外ノ角チ儒道内ノ九チ佛道中ノ幣束ナ神道コレ神儒佛ノ三ツナリ

一 中央ニ幣束七本立神酒熨斗供物三方右之品飾リ置始司追風罷出天長地久風兩順治之祭事暫クノ内アリ

一 懿テ土俵四本柱易ノ定ナリ土俵之内ナ大極ト定左右之入口ナ陰陽ト取四本柱ハ四時五行中央之土ナ加木火土金水又ハ仁義禮智信之五常ナリ水

引ハ黒赤黃三色之絹ヲ以北之柱ヨリ卷初メ北之
柱江卷納ルハ出ル人入人ヲ清ムル心ナリ北チ極
陰ト云相撲ニ是ナ役柱ト名附俵ナ以テ形ナス

ハ五穀成就之祭事ナリ

一上覽之土俵ハ勸進相撲トハ相違ナレトモ易一躰
之理違フ事有間鋪ナリ

右祭事濟土俵之上ニ飾リ置品々行事四人東西ヨリ出
テ持テ入ル後行事先ニ立テ相撲人二十人程ツ、段々
ニ出テ禮義ヲ正シ土俵之上ニ平伏ス殘ラス揃ヒ行事
相圖致ス其時一統土俵入濟又平伏ス一人ツ、圍ニ入
ル如此シテ東西六度ニ濟東西之關取横綱ナ帶メ繪圍
之通土俵入スニ其後名乗言上行事東西ヨリ一人ツ、
出又相撲合セ候行事一人土俵之内ニ入テ次ニ東西三
リ相撲人出テ平伏ス言上之行事土俵江出テ東之方誰
西之方誰ト高聲ニ名乗テ入ル其内白張着用之者水ト
紙ナ遣ス也相撲人土俵江掛ル行事聲ナ捕テ中ニ立テ
古法之如ク待ナシニ取組行事勝相撲誰ト名乗尤行事
ハ代々殘ラズ侍烏帽子素袍着用ス合行事ハ素袍之肩
ナ故リ出ル又四本柱之元ニ行事四人平伏シテ扣居ル
是ハ勝負依怙十ク見分ル事ナ司ル右代リ々行事十四
人ニテ相勧申候

○上覽相撲之勝負附

六月十一日上覽相撲取組

△此印勝

中入後

但中入之間相撲人江
赤飯下サレ候

△綠

山

シタテナケ

行事式守見藏

荒瀬川

中略

行事木村庄之助

柏

戸

ノトワツノ

雷

電

行事

吉田追風

キガチ

谷

風

△陳紋龍幕

小野川

キニケ

丸八拾三番

弓弦扇子三役

古法之通勝之方江相渡

九ツ時相撲始リ七ツ時無滯相濟

○上覽行事之式

年寄三拾六人染帷子麻上下着用ニテ土俵場江代リ々
相結行事拾四人素袍ニテ侍烏帽子木劍ヲ帶シ追風始
土俵入之節揃色之素袍侍烏帽子着用ニテ土俵ノ上ニ
之節古例ニ依テ往古追風禁裏ヨリ賜リタル紫ノ狩
紐分タル獅子王之團扇持風折烏帽子狩衣四幅之袴
着用土俵之上草履御免ニテ相勤候

正海山記

相撲之私記

成島左雄

中略
第三回 三役と締せし沙田
本村庄の仲にじき九紋郎がまくらを賣て海舟の
身を起さず大づかが一乞ひもあらず梅戸源安が
さうしてのひ食事も有てこの如きたゞと見(左)は
三日もあらずにはりて古巣(左)へは先づちを失
相手多(うち)城主(左)あもしと代職(左)へす
賞(左)と麻袋(左)が放(左)せてもうとお卓(左)に
酒(左)はかけが実(左)の陣幕に雷電(左)と轟(左)
かみも(左)えど浪(左)もとめどいと食(左)小陣幕を
聞く雷(左)のと(左)と(左)と(左)と(左)
よ(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
里(左)を(左)お撲(左)に(左)食(左)と(左)と(左)
膳(左)を(左)心(左)の印(左)もあ(左)と(左)と(左)
う(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
て(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
幅(左)の(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
世(左)傳(左)下(左)持(左)付(左)と(左)と(左)と(左)
見(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
翁(左)や(左)わゆ(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
店(左)小(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
ため(左)を(左)と(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
に(左)ゆ(左)れ(左)と(左)と(左)と(左)と(左)
ま(左)も(左)ゆ(左)み(左)ま(左)に行(左)う(左)と(左)
乃(左)下(左)う(左)野(左)氣(左)う(左)あ(左)風(左)失(左)と(左)

なきて重解しまさへ声を擱さず小夜がをま
ともぞぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
に志が一たをひて重解り声とこえに西の風
かとあてもとをまき小野川こうめふく夜を
め一音たむれとし近風扇風よ重解をめけ
るの室てうかびてうかびてうかびてうかび
小前後乃とまどとく晴負せせなりとく良たる
海う波う波う波う波う波う波う波う波う
高へこもくみこらへな生と野見の宿禰歌連
城うれし島山の月次所うちを居城連入せ
ゆくゆくゆく事うゆるわゆくぞとくゆくゆ
にゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
早かとしかかとけ入ぬをうめゆることと
鐵田内府乃道はれ國常樂寺小の鹿と
之を連続實をそ續る法い其腰を代賞す
ゆきを今小のくわんといゆ

勝了に今後坐持う
え乃所向例焉

寛政四壬子年初秋四真寫